

平成 30 年度全国学力・学習状況調査 調査結果を踏まえた 学力向上 10 の提言

〔学びに向かう力、人間性等〕の育成

提言 1 各教科の勉強が好きである児童生徒を増やす

京都府は各教科の勉強が好きである児童生徒数が全国平均よりも少ない状態が続いており、また、学年が上がるにつれてその割合が低くなる傾向があります。「好きである」と言えることが明日の授業の学びに向かう力を育て、基礎基本の習得にもつながります。その教科の勉強が好きである児童生徒を増やす視点での授業改善が必要です。

提言 2 褒める、評価するなどの取組を学校生活の中で意識的に行う

児童生徒質問紙での「自分にはよいところがあると思う」、学校質問紙での「児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する取組」が、ともに全国平均より低い傾向があり、意識的に児童生徒のよい点を評価することが大切です。それは個々の児童生徒を「よく見る」ことにつながります。

提言 3 自己の将来や夢について考えさせる指導(キャリア教育)の充実

児童生徒質問紙での「将来の夢や目標を持っている」、学校質問紙での「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした」が、ともに全国平均より低い傾向があります。夢や目標を持ちそれに向けて今何ができるか、何が必要か、と考えることが、学びに向かう力を育みます。教科横断的かつ計画的なキャリア教育が必要です。

言語活動の充実などの授業改善

提言 4 複数の情報を関連付けて考え、他者に説明する課題解決型学習をあらゆる教科で行う

文章や図表、グラフ等複数の資料の中から必要な情報を探し、それらを関連付けて考え、課題を解決する授業が求められます。そうした学習の拠点として、学校図書館を整備することも必要です。

提言 5 思考力・判断力・表現力等のもととなる「ことばの力」を育成する

文章等から正しく情報を読み取って考え、その考えを他者に説明するとき、思考力・判断力・表現力等が積極的に働くこととなります。その土台となる「ことばの力」の

育成を、あらゆる教科で進める必要があります。

提言6 生徒指導の機能を強化した学級経営

グループで考えを出し合い、よりよい考えを作り上げる学習活動を円滑に進めるには、生徒指導の機能(自己決定の場・自己の存在感・共感的な人間関係)を活かした学級経営が必要です。

提言7 家庭学習に関わる共通認識を持つ

〔調べたり書いたりする宿題〕を組み入れる、家庭学習の方法について具体例を挙げながら教える等、教職員間の共通理解をはかりながら、授業改善を進めていくことが大切です。

提言8 理科：観察や実験の活動を充実させる観点からの授業改善を進める

理科室での観察や実験を行う回数が全国平均よりも少ないことは、小中学校の課題です。実体験からの学びが、学びに向かう力・人間性等の伸長にもつながることから、観察や実験を行う回数を増やし、活動を充実させる観点から授業改善を進める必要があります。

学校の組織力の充実

提言9 地域の人材を活用するなどの〔社会に開かれた教育課程〕の実現

京都府ではコミュニティ・スクールの導入が進んでいますが、その取組の中で、学校の教育目標に即して、地域の人材を外部講師やボランティア等に活用することが必要です。

提言10 模擬授業や事例研究などの実践的な校内研修や校内授業研究の充実

模擬授業や事例研究などの実践的な校内研修を増やすこと。また、校内授業研究を含む校内研修の質・量の向上を目指し、事前研・事後研の方法を工夫するなどして、校内の「授業力」を組織的に向上させることが必要です。